



TITLE:

元稹の豔詩及び悼亡詩について

AUTHOR(S):

山本, 和義

CITATION:

山本, 和義. 元稹の豔詩及び悼亡詩について. 中國文學報 1958, 9: 54-84

ISSUE DATE:

1958-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176695>

RIGHT:

元稹の豔詩及び悼亡詩について

山 本 和 義

京都大學

序

元稹^{げんしん}は、白居易と屢々併稱される中唐の詩人である。

私は、本稿において、元稹の七百餘首の作品の中から、異性に關係してうたわれた豔詩と悼亡詩を選んで、考察する。豔詩は、元稹が、二十代の初めに経験した戀愛についてうたつた詩であり、悼亡詩は、三十代の初め、妻を亡くしての悲哀をうたつた詩である。この兩者を對照しつつ、元稹の女性に對する愛の姿と、それが、作品として、如何に結晶しているか、に目を注いでみよう。

一

元稹^{げんしん}（微之^{びし} 779～831）の豔詩及び悼亡詩について論ずる

に先だつて、その詩文集について、簡単な考察を加え、ついで、その中に、豔詩及び悼亡詩が、どうあらわれるかに注目しよう。

歴代の正史の藝文志から、元稹の著作として著録されているものを列挙すれば、次の如くである。

元氏類集三百卷

元氏長慶集一百卷又小集十卷

元白繼和集一卷

元稹白居易崔玄亮三州倡和集一卷

元和制策（以上新唐書藝文志）

承旨學士院記

元氏集四十八卷又逸詩二卷

元稹白居易李諒杭越寄和詩集一卷（以上宋史藝文志）

以上のうちで、詩を収めるものに限つて考えてみる。元

白繼和集・元稹白居易崔玄亮三州倡和集・元稹白居易李諒杭越寄和詩集は、現在傳わらず、かつ元稹の詩に限つてみれば、すでに長慶集に編入されているので、それについては、論じない。

白居易（樂天 772～846）の撰した元稹の墓誌銘（白集卷）には、次のように記す。

公、文一百卷を著し、題して元氏長慶集となす。又、古今刑政の書三百卷を集めて、類集と號す。並びに、代に行わる。

新唐書藝文志にみえる元氏長慶集一百卷は、これである。ただ小集十卷が、見えないことは、注目すべきことである。

まず、元氏長慶集百卷の成立について、考えてみよう。卷二十二にみえる詩の題にいう。

郡務、稍や簡なり。因つて舊詩を整比し、并びに焚削の封章を連綴して、篋笥に繁委すること、百軸を逾ゆるに僅し。偶たま自歎を成し、因つて樂天に寄す。

時に、元稹は、刺史として越州にあつた。長慶四年（824）、四十六歳のことである。文集百卷は、すでにこの時、成立する條件の一つを備えている。さらに、文集に、長慶集の名を冠したことは、その可能性を、より有力にする。元稹の撰した白氏長慶集の序（元集卷五十一）にいう。

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

長慶四年、樂天、杭州刺史より右庶子を以つて詔還せらる。予、時に會稽に刺たり。因つて盡く其の文を徵するを得て、手自ら排綴し、五十卷を成す。凡そ二千一百九十一首なり。前輩、多くは前集中集を以つて名と爲す。予、以爲らく、陛下、明年秋當に改元して、長慶是に訖るべし。因つて、白氏長慶集と曰う。……長慶四年冬十二月十日、徵之序。

元氏長慶集も、白氏長慶集と同じく、長慶の年號を記念する意味があると考えられる。これは、元氏長慶集の成立が、白氏長慶集の成立と、時間的に距らないことを示すであらう。さらに、現在通行する元氏長慶集六十卷本には、寶曆以後の作品が、きわめて少い事實も、それを裏附けるであらう。以上のことから、元氏長慶集百卷は、長慶四年に近い時期に成立した、と想像することが可能である。太和三年に作られた白居易の詩の自注に、「微之文集、凡そ一百卷」とみえ、百卷の成立が、この年を下らないことを、確證している。

次に、小集十卷についてみてみよう。小集の名は、宋代

の文獻にもみられる。元氏長慶集六十卷を刊行した南宋の洪适（景伯 1117～1184）は、乾道四年（1168）の跋において、次の如くいう。

唐志に著録するもの、長慶集一百卷小集十卷有り。惟だ閩蜀刻本のみ六十卷と爲す。三館の所藏、獨り小集有り。其の文、蓋し已に之を六十卷中に雜うるか。

これと同様のことが、洪适の弟・洪邁（景廬 1120～1174）の容齋五筆卷三に、「元微之詩」と題してみえる。三館とは、太宗の太平興國二年（979）にたてられた崇文院の昭文書庫・集賢書庫・史館書庫を指すものであり、仁宗の慶曆元年（1039）、王堯臣（伯庸 1001～1046）等によつて編された崇文總目は、その藏書目録である。崇文總目には、元稹長慶集十卷が著録されており、小集とは記さないが、洪适のいうところに合致する。小集の名が、文獻にみえるのは、これが最後であり、のち佚亡したものと思われる。

さて、百卷と小集十卷の相互關係は、どうであつたらうか。洪适が、「其の文、蓋し已に之を六十卷中に雜うるか」といい、又、集外文章の「令狐（楚）相公に上る詩の啓」

に注して、「此の一篇、長慶小集及び舊唐書列傳に見ゆ」ということより推して、小集十卷は、百卷の補遺であつたと思われる。又、その成立は、墓誌銘に記載がなく、新唐書藝文志に至つて、始めて記載されていることからすれば、元稹の死後に成つたとも想像される。

元氏長慶集は、その一部が、日本に舶載されている。元稹の詩は、その死後まもない時期に、すでに日本で讀まれており、その最も早い記録は、文德實錄に、承和五年（唐開成三年 833）のこととしてみえる。

藤原岳守……出でて大宰少貳と爲る。因つて大唐人の貨物を檢校し、適ま元（稹）白（居易）の詩筆を得て、奏上す。帝、甚だ耽悦す。

ほぼこれと近い時期に、杭越寄和詩集が、僧侶の持ち歸つた書籍の目録に、しばしばみえる。ややおくれて、藤原佐世の編した日本國見在書目録（891～897頃の成立）には、元氏長慶集二十五卷が、杭越寄和詩集とならんで、著録されている。二十五卷は、長慶集百卷本の零本とみることが出来る。この頃舶載された元稹の詩集は、その後、失われ

てしまつた。

さて、元氏長慶集百卷本が、その後の中國では、どうであつたか。崇文總目が、元氏長慶集十卷を著録することは前述したが、それは、新唐書藝文志にいう小集である。百卷本の完本は、宋代の書目には、もはやあらわれない。ただ、明の焦竑（弱侯 1541～1620）の撰した國史經籍志は、ひとり、元氏長慶集一百卷と小集十卷を著録するが、四庫全書總目提要が、「其の書、舊目を叢鈔して考核する所なく、存亡を論ぜず、率爾に濫載す。古來の目錄、ただ此の書、尤も馮るに足らず」と評する書目でもあり、信ずるに値しない。

北宋の末、百卷本にかわつて、現行する元氏長慶集六十卷本が刊行された。劉麟（應禮）の宣和甲辰（1124）の序を冠するもので、その一部を引用すれば、次の如くである。

元微之、盛名、元和長慶の間に有り。其の論奏する所を觀るに、時務に切當ならざるはなく、詔誥歌詞、自ら一家を成す。大手筆に非れば、曷ぞ是に臻らん。其の文、一時に盛傳すると雖も、厥の後、浸やく亦た顯

元稹の鹽詩及び悼亡詩について（山本）

れず。唯だ書を嗜む者、時時傳録す。亦た甚だ惜しむ可きにあらざるや。僕の先子、尤も其の文を愛し、嘗つて手自ら抄寫し、曉夕玩味、稱嘆して已まず。蓋し、其の文の工にして、之を傳うることの、久しく且つ遠からざるを惜しむなり。迺者に、手澤を閱るに因つて、悲しみ自ら勝えず、謹んで、工を募りて刊行す。庶幾くは、元氏の文、先子に因りて、復た世に傳わらんとを。斯の文、舊と其の序を亡い、第だ冠するに新唐書微之の本傳を以つてす。則ち、微之の文に於けるや、其の造る所の淺深、概ぼ見る可きなり。宣和甲辰仲夏晦日、序す。

この序から推して、百卷本の殘帙を整理し、或は、小集十卷を雜えて、六十卷本が成立したものとみられる。この北宋刊本は、南宋に入つて、翻刻された。乾道四年（1168）の洪适（景伯 1117～1184）の跋を附して刊行されたものが、それである。この時、卷末に、集外文章一卷が加えられている。晁公武（子止）の郡齋讀書志（衢州刊本）に、「元氏長慶集六十卷外集一卷」とみえる（袁州刊本は、外集につい

ての記載を缺く)。ここにいう六十卷は、上述の宋刊本に相違ない。さらに、陳振孫(伯玉)の直齋書錄解題に著録する元氏長慶集六十卷も、むろん宋刊本である。ただ、中興館閣書目及び宋史藝文志の元氏長慶集八卷・元相逸詩二卷は、その性格を定め難い。しかし、百卷本、或は六十卷本の残帙であることは推量出来る。かくの如く、宋代以來、元稹の詩文集は、元氏長慶集六十卷が行われるようになり、百卷の本は、完全に佚亡した。六十卷の宋刊本は、その一部分が現存する。まず、北宋刊本についていえば、四部叢刊本の卷末に附された張元濟の「元氏長慶集校文」(1927)に、次の記載がある。

戊午(1018)の秋、江安の傅沅叔同年、殘宋建本元微之文集卷一より十四、卷五十一より六十の、凡そ二十四卷を見るを得たり。劉序、目錄並びに存す。

ここには、二十四卷というが、校文をみると、卷一より卷十までと、卷五十一より卷六十までの、二十卷のみが、宋刊本によつて校されているにすぎず、卷十一より卷十四までは、宋刊本によつていない。その間の事情は、詳らか

にしない。又、傅增湘(沅叔)の「校宋蜀本元微之文集十卷跋」(北平圖書館刊 1925)には、「元微之集十六卷、一より六に至る、又、末十卷」とあつて、張元濟の校文とは、一致しない。とにかく、近年まで、北宋刊本の一部が存していたことだけは、確められる。又、南宋刊本は、日本の靜嘉堂文庫に、卷四十から卷四十二に至る三卷が、藏されている。更に古くは、安政三年(1856)に成つた經籍訪古志には、殘本五卷が著録されているが、現在では、その所在を明らかにしない。

さて、現在通行する元氏長慶集六十卷のテキストには、三種ある。ともに、南宋刊本より出る。その一つは、「嘉靖壬子(1562)仲春十日、東吳董氏、宋本翻雕於茆」の刊記を持つ明刊本が、四部叢刊の一として、景印されている。このテキストについては、後述する楊鈔本の跋で、錢謙益が、董氏は、南宋刊本の不明の箇所を、己意で補つてゐると批判している。董氏の刊本は、のちに、馬元調(巽甫)が校して、重刻した。婁堅(子柔 1567~1631)の萬曆甲辰(1605)の「重刻元氏長慶集序」を、冠する。しかし、こ

の刊本も、完全に復原されたものでないことは、馬元調が、その凡例でいうところである。

集中の闕字、他書を査して増入する者、十(分)の四に止まる。其の従りて考うるところなき者、尙お十(分)の六あり。博古の士に望みなきこと能わす。

さらにこの時、馬元調は、元稹の逸詩逸文を集めて、元氏長慶集補遺六卷を編して、卷末に加えた。しかし、元稹の詩文は、これで完全に集成されたわけではない。

元氏長慶集六十卷の他の一つは、明の楊循吉(君謙「56~154」)の弘治元年(1488)の跋を有する鈔本で、最近、北京の文學古籍刊行社から景印出版されたものである。跋に、「筆生徐宗器に命じて、原本を模録せしむ」というとおり、靜嘉堂文庫所藏の南宋刊本と、その行款が一致している。

楊循吉のよつた南宋刊本も、董氏の場合と同様に、不明の箇所があり、それは空字のまま残された。のちに、この鈔本を入手した錢謙益(受之「1682~1664」)は、さらに別の南宋刊本を得て、校補した。しかし、なお不完全なテキストである。

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

以上が、元氏長慶集六十卷が、成立し、それが刊行された経過であるが、不完全なテキストであり、字句の異同も著しい。それを補うものとして二つの校勘記がある。一つは、清の盧文弨の羣書拾補に收められた「元微之文集」(抱經堂叢書)と題するものである。それは、馬元調本を底本として、南宋刊本を得て校勘したものである。他の一つは、前述の四部叢刊本の末尾に附された張元濟の「元氏長慶集校文」である。この校勘には、一部分北宋刊本を用いている。

以上、元稹の詩が、どうして伝えられて来たかをみたが、以下、本稿において論ずる豔詩及び悼亡詩が、上述のテキストに、如何にあらわれるかを考察する。

悼亡詩は、六十卷本の卷九に、三十三首が録されている。悼亡詩は、後述するように、元和四年、妻韋叢を亡つての悲しみの詩である。元和七年に、すでに悼亡詩數十首が作られていたことは、元和十年の「詩に叙して、樂天に寄する書」(元集卷三十)にみえる次の記載によつて知られる。

不幸、少くして伉儷の悲しみあり。存を撫し往に感じて、數十詩を成し、潘子(潘岳)の悼亡に取りて、題

と爲す^な。

しかし、百卷本に、どれだけの詩が收められていたかは、確められない。ただ、元和七年に近い時期に、元稹は、裴^{はい}淑と再婚していることからして、數十首という數は、その全體に近いと想像出来る。だとすれば、現在、六十卷本に錄する三十三首は、比較的よく遺されているとみられる。

豔詩は、六十卷本には、一首も錄されていない。「詩に叙して、樂天に寄する書」に、次のようにいう。

(前略) 因つて豔詩百餘首を爲る。詞に今古あり、又^また兩體。

元和七年までに、豔詩が、百餘首作られていたことが知られる。元和十年、白居易に贈つた詩集二十卷には、これが收録されていたわけであるが、後日、編纂された百卷本では、どうであつたろうか。百卷本について考えるには、資料を缺くので、今は、臆測するにすぎない。日本に舶載された元稹の詩文集には、その名を知りうるものとして、「元氏長慶集」と「杭越寄和詩集」があることは、先に述べたところであるが、一〇三一年頃、藤原公任^{ふじわらのきんとう}(966~1041)

によつて編纂された和漢朗詠集には、元稹の詩句がみえる。その中には、元氏長慶集六十卷本には含まれず、かつ明らかに豔詩として分類されうるものが、發見される。うち一つは、才調集にみられる「薛濤^{せうとう}に贈る」と題する詩の二句であり、他の一つは、「宮詞」と題する詩の二句であり、ともに逸詩の一部である。さて、これらの詩句が、如何なる経路で我國にもたらされたかを考えるとき、それらは、元氏長慶集に收録されていたのではないかと想像することが出来る。しかし、それらは、別の経路を経た可能性もあるわけであつて、斷ずることは出来ない。

それにしても、元氏長慶集六十卷本が、豔詩を含まぬのは、偶然失われたことによるのであろうか。六十卷本の成立に前後する時期に、元稹の豔詩が、文獻にどうあらわれるかをみてみよう。唐末から五代にかけての人である韋穀^{いこく}が編纂した才調集には、元稹の詩五十七首が採られておりすべてが、豔詩といつてよい作品である。五十七首中、六十卷本と重複する詩は、わずか一首にすぎない。又、北宋の趙令時^{ちやうれいし}(德麟)は、「傳奇鶯鶯の事を辨ず」^⑥(侯鯖^{こうさつ}に錄下)におい

て、「僕の家、微之の作る元氏古豔詩百餘篇有り」といつている。すなわち、たとえ百卷本の豔詩の部分が失われていたと假定しても、豔詩は、他の經路で存していたらしいのであつて、六十卷本にそれが見えないことは、故意に除いたとする可能性が、きわめて大きい。南宋に入つて、郡齋讀書志の衢州本は、六十卷本以外に、「外集一卷、詩五十二篇、皆な宮體なり」と記しており、これは、才調集によつたものである。もし、六十卷本の編者が、故意に豔詩を除いたとすれば、その意は、何處にあつたであらうか。元稹にややおくれる詩人杜牧(牧之 803~853)は、李戡(定臣)の語を、次のように引用している。

元(稹)白(居易)の詩は、織豔にして不逞なり。莊人雅士に非れば、多く其の破壊するところと爲る。民間に流れ、屏壁に疏せられ、子父女母、交口教授す。淫言媒語は、冬寒夏熱のごとく、人の肌骨に入りて、除去するべからず。吾、位無く、法を用つて以つて之を治するを得ず。

(樊川文集卷九・李府君墓誌銘)

或は、唐の李肇は、次の如くいう。

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

元和以後、文筆を爲すに、……淺切を白居易に學び、淫靡を元稹に學ぶ。俱に名づけて、元和體と爲す。

(唐國史補卷下)

唐代の元稹の詩に對する批評の中に、すでに、豔詩を好ましからざるものとする傾向が、あらわれている。これから推して、六十卷本の編者も、同様の立場から、豔詩を、その詩文集から、除いたのではないか、と想像される。

今日、元稹の豔詩は、韋穀の撰した才調集によつて、讀まねばならない。他に、馬元調の編した元氏長慶集補遺も參考になるが、才調集と重複している。

なお、元稹の豔詩と密接に關係する小説「鶯鶯傳」は、宋の李昉等によつて編纂された太平廣記の卷四八八・雜傳記にみえる。これも、六十卷中には、收録されていない。

注

本論文に利用したテキスト、及び參考書は、主に次のものである。

元氏長慶集(北京・文學古籍刊行社・影楊循吉鈔本・一九五六年)

白氏長慶集(北京・文學古籍刊行社・影紹興刊本・一九五五年)

才調集補註（江蘇書局重刊・
光緒二十年）

陳寅恪著 元白詩箋證稿（上海・古典文學出版社・一九五八年）

① 元稹や白居易は、長慶の年號に、特別の愛着をもっている。その氣持をうたう詩に、「題長慶四年曆日尾」（元集卷二十二）がある。

② 白氏長慶集卷二十八、「予與微之老而無子發於言歎著在詩篇今年冬各有一子戲作二什一以相賀一以自嘲」と、題する。

③ 「日本國承和五年入唐求法目錄」・「慈覺大師在唐送進錄」・「入唐新求聖教目錄」（ともに、大正大藏經第五十五卷目錄部所收）

④ 元氏長慶集殘本五卷 宋葉本賜
藏文庫藏

現存第四十三至第四十六、第四十八合五卷、每卷首題元氏長慶集卷第幾、次行有目錄、每半板十三行、行二十三字、界長七寸一分、幅五寸、宋諱闕筆、板心有雕工名氏、此本裝爲粘葉、蓋不失宋時之舊觀者、某氏又藏第四十卷、即與此同種、

⑤ 「初除浙東妻有阻色因以四韻曉之」（長慶集卷二十二）

二

豔詩及び悼亡詩が作られた背景を、元稹の經歷の中で、みてみよう。

元稹は、大曆十四年（779）、六人兄弟の五番目として生まれ、その幼年期を、長安で過した。家柄は、その祖先に

隋の兵部尙書を出したこともあつたが、當時は、もはや大貴族ではなかつた。父は、比部郎中舒王府長史の官職にあつたが、その家庭は、貧しかつた。元稹の母鄭氏の墓誌銘（白集卷四十二）で、白居易が、「夫人、婦となりし時、元氏世々食貧し」といつているのでも、そのことは知られる。その上、元稹八歳のとき、父が没し、少年期には、鳳翔の姉のもとに、寄寓しなければならぬような状態であり、「衣は體を布おきわず、食は腸に充たぬ」（元集卷三十三・同州刺史謝上表）ほどの困窮ぶりであつた。しかし、この不遇な少年期、かつ當時は、まだ貴族の勢力の強力であつた時期であるが、やがて宰相の地位に昇るべき元稹の才能は、非常な努力で磨かれつつあつた。後年、宰相の地位を経て、同州刺史に貶されたとき、その少年時代を、次のように、回顧している。

幼學の年、師の訓おしえを蒙らず。鄰里の兒稚は、父兄ありて、爲めに學校を開くに感ずるによりて、涕咽發憤して、詩書を知らんことを願う。慈母、臣を哀あはみて、親しく教授をなす。年十有五にして、明經出身を得たり。是れより、苦心して文を爲り、夙夜しやくや、強めて學べ

り。(元集卷三十三・
同州刺史謝上表)

やがて、その努力は、貞元九年(十五歳)に、明經及第をもつて報いられ、官僚としてのスタートを切る。詩人としての才能も、この少年期に、培われつゝあつたことは、元和十年、詩集とともに、白居易に贈つた書簡(敘詩寄樂天書)に、「稹、九歳にして、詩を賦することを學ぶ。長者、往往その教うべきに驚く。年十五六にして、粗ぼ聲病を識りぬ」とあるのでも知られる。

貞元十九年(二十五歳)、拔萃科に第四等で及第し、同時に及第した白居易と親交を結び、ともに、祕書省校書郎の職に就いた。これより、二人の詩人は、終生その友情を深め續けた。

ちようどこの頃、豔詩にたびたびうたうところの戀愛を、經驗した。その事迹は、白居易に贈つた「夢遊春七十韻」の序で、「斯の言たるや、吾を知らざる者をして、知らしむべからず、吾を知る者、亦た、知らざらしむべからず。樂天は、吾を知るなり。吾、あえて吾子をして、知らざらしめず」といつているのでも知られるように、それは、親

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

しい友人のみが知るところであつた。かくの如く、元稹自らが祕密とした事實を、今日、明らかにすることは、もはや困難である。ただ、今、遺されている豔詩と、太平廣記に收録されている「鶯鶯傳」を、手がかりに、少し考察してみよう。「鶯鶯傳」は、その體驗をひめている自傳的な小説である。その梗概は、次の如くである。

話は、貞元十六年のこと、まだ女色を知らない二十三歳の書生張生は、十七歳になるいとこの崔鶯鶯と、ふとした機會に、蒲州なる普救寺で逢つた。やがて、二人は、正式の婚禮を経ずして、その關係を深めてゆく。翌貞元十七年、張生は、受験のため、長安に去り、鶯鶯は、再會を期待しつつ、張生を送る。ところが、張生は、試験に失敗して、そのまま、長安に滞る。手紙で愛情を交すこともむなしく、その戀は破綻し、一年餘りして、崔鶯鶯は、人に嫁し、張生も妻を迎えた。

これが、「鶯鶯傳」にみえる戀の姿であるが、元稹の經驗したそれと、どんな關係にあるであろうか。この問題は、宋代以來、種々に考證されているが、まだ明らかにされてい

ないし、又、將來もされえないであろう。代表的な二つの考證をみよう。北宋の趙令時は、「傳奇鶯鶯の事を辨ず」において、この小説に描かれた戀愛は、ほとんど元稹自身が経験したものだとする。それに對して、近時の陳寅恪氏は、この小説が、自傳的要素を多くもつことを認めながらも、事實とは、相當の距離があるものと考證している。今、二者の説を參考にして、二三の問題點を探つてみよう。まず年齡的な關係をみると、張生と元稹は、ほぼ一致する。又、受験及び結婚も、元稹の経験と等しい。これらからみても、ほぼ等しい戀愛経験があるとみて、さしつかえなからう。さて、相手は、どんな女性であつただろうか。いとこの關係については、趙令時が、それを肯定するのに對して、陳寅恪氏は、それを否定し、所謂「仙」と稱せられる女性、すなわち、堅氣でない女性だとしている。なるほど、小説及び豔詩には、「眞」、或は「仙」のことが使われている。しかし、後述するように、それは、元稹の文學の問題に關聯して考えるとき、陳寅恪氏の説は、是認できない。いとこの關係であつたか否かは別として、小説にあらわれるよ

うな平凡な堅氣の市民の一人を考えてよいと思われる。かかる平凡な市民も、戀愛生活が可能であつたことは、白居易の「井底 銀瓶を引く」(白集 卷四)にもみえ、このような風俗が、やや廣く行われていたのであり、元稹の経験も、それらの中の一つであつたと考えられる。次に、この女性に統一されると考えられるものに、崔鶯鶯・雙文・九九の三つの呼稱がある。雙文ということからして、複字の名であつたことは、想像されるが、鶯鶯であつたか、九九であつたか、或は、他の二字であつたかは、決め難い。今、假に雙文の名で、この女性を呼ぶことにする。

この二人の戀愛を、破綻に導いた原因を考えてみなければならぬ。關係は、元稹が背くことによつて、終つたであらう。全唐詩に「告絶詩」としてみえ、又、「鶯鶯傳」にみえる雙文の詩に、「棄置 今何をか道わん、當時 且つは自ら親しむ。還た舊時の意將て、憐取せよ 眼前の人を」とある。元稹は、雙文を棄てて、韋叢との結婚をえらんだのである。元稹が、かかる態度をとつた理由は、種々に想像されようが、白居易は、「夢遊春に和する詩一百韻」

(白集卷
十四)

の序で、「婚仕の際」という問題にふれている。貴族政治の社會にあつて、低い身分に成長した元稹が、官僚としての將來の榮達をはかるとき、韋叢の如き高門の女性を求めたのはけだし當然であろう。ところで、元稹は、「鶯鶯傳」で、張生の心境を、次のようにかいてゐる。

大凡、天の尤物に命ずる所たるや、其の身を妖せざれば、必ず人を妖す。崔氏の子をして富貴に遇合せしめば、寵嬖に乗じて、雲となり雨とならずんば、則ち、蛟となり螭となる。吾、其の變化を知らず。昔、殷の辛、周の幽は、百萬の國に據りて、其の勢、甚だ厚し。然れども、一女子、之を敗り、其の衆を潰して、其の身を屠り、今に至るも、天下の僂笑するところとなる。予の德、以つて妖孽に勝るに足らず。是を用つて情を忍ぶなり。

これが、張生が、鶯鶯に別れねばならぬ理由であつた。すぐれた女性として描きつつ、最後に、それをしりぞけている。鶯鶯は、富貴の門に入ることを許されない女性であつた。元稹は、社會的成功と、自己の戀との輕重を問わ

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

れたわけであり、貴族によつて支配された社會に、等しくみられる悲劇が、ここにはある。ここで、元稹は、社會的成功への道を選んだわけである。元稹の雙文に對する態度は、冷酷である。しかし、單に輕薄な態度だとは、いいされない。妻の死後に作られた「夢遊春」において、雙文・韋叢の二人の女性との關係を同時にうたいつつ、その輕重の度は異なるにしても、ともに人生への不安としてうたつてゐることは、その經驗に、相當の苦痛が秘められてゐることによるのである。

以上が、元稹と雙文との戀愛生活の姿として、想像されたところである。

貞元十九年、校書郎の地位にあつた元稹は、韋叢（茂之）と結婚した。韋叢は、代々高官を出している韋氏に成長した女性であり、父夏卿は、太子少保になつてゐる。叢は、その季女であつた。時に、元稹は二十五歳、韋叢は二十一歳であつた。雲谿友議は、才思ある女性で、二人はよき夫婦として、世に聞えた、としるす。

元和元年（二十八歳）、元稹は、白居易とともに、才識兼

茂明於體用科に應じて、首席で及第し、左拾遺に任じたが、やがて、權力者に容れられずして、河南縣尉に貶された。

この九月十六日、母が没した。翌元和二年、監察御史となり、元和四年三月、東蜀に使い、還つて監察御史として、東臺に分務した。すなわち、洛陽に勤務した。この元和四年七月九日、韋叢は、一女保子を遺して没し、十月十三日、咸陽の地に葬られた。墓誌銘（韓昌黎集卷二十四）は、中唐の文學を代表する一方の旗頭である韓愈（退之 768-824）によつて書かれた。元稹と韋叢の結婚生活については、元稹自らが、「亡き妻韋氏を祭る文」（元集卷六十）で、悲痛な感情をこめて

しるしてあり、貧困な生活の中で築きあげられた夫婦の情愛を知ることが出来る。この悲しみをうたうのが、悼亡詩三十三首である。

翌元和五年には、政界でも志を得ず、江陵府の士曹參軍に左遷され、その人生に對する不安は、複雑な型で深まつてゆく。

江陵における元稹は、安氏を妾とした。「安氏を祭る誌」（元集卷五十八）に、次のようにしるす。

予の稚男荆の母を、安氏、字は仙嬪（せんぴん）と曰う。江陵の金限郷（きんげんきょう）莊敬坊沙橋の外二里なる娼樂の地に卒しぬ。始め辛卯の歲（元和六年）、予の友致用、予の愁を憫みて、予が爲に、姓をトして、之を授く。四年、供えり。

このように、安氏との生活も、短くして終つた。

四年の江陵の生活の後、元和九年、唐州從事となり、翌年、一たび都によばれたが、まもなく、通州司馬に遷された。^①通州にあつて、元稹は、繼室裴淑（柔之）をむかえ、終生つれそつた。二人の間柄については、韋叢との結婚生活と同じく、琴瑟相和すものであつたことは、雲谿友議の「豔陽詞」にみえる次のことばでも、知られる。

初め、京兆の韋氏、字は蕙蕪（けいせう）を娶る。官未だ達せず、貧に苦しむ。繼室は、河東の裴氏、字は柔之なり。二人俱に才思あり。時彦は以つて嘉偶と爲せり。續けて、裴淑については、次の如くにもいう。

元公と柔之、琴瑟相和し、亦た房帷の美なり。

裴淑が、才思ある女性であつたことは、元稹自身が、「通（州）の人、ともに詩を言るべき者なし。唯だ、妻の

淑^{しゆく}のみ、旁に在りて、狀を知る」(元集卷十二・酬樂天(東南行詩一百韻の序)との

べていることでも知られる。胡震亨^{こしんこう}の唐音癸籤も、「女子

の詩を能くする者」(卷九)として、裴淑をあげる。

以後、元稹の官僚としての生活は、浮沉を重ねる。元和十四年、虢州長史に徙り、膳部員外郎となり、翌年には、祠部郎中知制誥となつた。憲宗が没して、穆宗が位についた長慶年間には、詩人としての名聲も高く、官僚としても、位人臣を極める。長慶元年、翰林の中書舍人承旨學士を経て、工部侍郎となり、二年二月には、中書門下平章事となつた。宰相の地位をえた元稹は、社會のきびしい非難によつて、わずか三ヶ月で、同州刺史にうつされた。三年、越州刺史となり、御史大夫の浙東觀察使を兼ねた。文宗の太和年間となると、禮部尚書を加えられ、三年には、長安に歸つて、尚書左丞となつたが、四年には、再び地方官として、戸部尚書・鄂州刺史・御史大夫・武昌軍節度使等の任を負つて、武昌に赴き、もはや、再び長安の土を踏むことはなかつた。太和五年(833)七月二十二日、急病で、武昌の地に没した。齡五十三を數えた。墓誌銘は、終生、親し

い友であつた白居易が撰し、太和六年七月十二日、咸陽に葬られた。

貧しい家庭に成長した元稹の一生は、宰相の地位を得たとはいへ、はげしい政争の中で、浮沉をくりかえし、加ふるに、家庭的にも、不幸が多く、不安定な生活の堆積が、その人格を形成する上に、一つのファクターとして働いたことは、容易に察しうるところであり、それは、文學作品の上にも、微妙な影を、投げかけている。

注

本章で、参考した主な文獻には、次のものがある。

舊唐書列傳

新唐書列傳及び宰相世系表

元公(稹)墓誌銘(白氏長慶集卷七十)

鄭氏墓誌銘(白氏長慶集卷四十二)

韋氏夫人墓誌銘(韓昌黎集卷二十四)

① 才調集に收録された「夢遊春七十韻」は、序を缺くが、白氏長慶集卷十四にある「和夢遊春詩一百韻」の序に引用されて、その一部を知ることができる。

② 馬元調の元氏長慶集補遺では、二十三を、二十二に作る。

③ 雲谿友議の豔陽詞では、茂之を、蕙聚に作る。

- ④ 陳寅恪氏は、「元微之遺悲懷詩之原題及其次序」（清華學報 X—3）で、結婚を、元和十三年と、考證している。

三

元和十年、詩集二十卷とともに、白居易に贈つた書簡・「詩に敘して、樂天に寄する書」で、豔詩について、次のようにいつている。

又、以つて教化を干す者有り。近世の婦人、眉目を暈淡し、頭髮を綰約し、衣服の脩廣の度、及び、匹配と色澤、尤も劇にして、怪た豔なり。因つて、豔詩百餘首を爲る。

元稹自身の理解によれば、その豔詩は、詩三百篇の精神に則らず、當時の華美な女性の姿態をうたうものであつた。では、これらの豔詩は、唐代の人々に、どう理解されてゐたであらうか。それは、第一章で引用した、李肇、または、李肇の言葉（六一頁）にみられたとおりである。社會一般の人々からは、歡迎された反面、文化人からは、激しい非難の言葉も、受けねばならなかつた。元稹自らがしるす如

く、偽作が世に横行するほどの評判を得たこれらの詩は、文學史の上で、一つの特徴を持つほどの性質によつて、當時の文壇における地位は、不安定であつた。その特色とは、それらの詩が、自己の體驗と密接していることである。豔詩には、愛人雙文のことをうたつたものが、多數存在している。にもかかわらず、書簡においては、全く別のことを述べるのは、不安定な評價に對する一種の妥協である。

豔詩の多くは、雙文との戀愛を、背景にもつてゐる。時には、名を綴り込んだ詩さえ、みられる。元稹以前の唐人にも、戀愛詩は、存するが、それらは、六朝詩の流れに立つものであつて、例えば、李白（太白 701—762）の閨怨詩の如きがある。それらの詩は、戀愛をうたいはするが、多くは假空のものであり、女性にかわつてうたうものであつた。この點において、元稹の豔詩は、一つの新しい性格をそなえている。

元稹の豔詩にみられるこの特色が、如何なる型で、表現されているか、それをいくつかの焦點に絞つて、考えてみよう。第二章で論じたように、元稹と雙文の戀愛は、破綻

している。次に引く詩は、その悲劇から遠くない時期に、その悲しみをうたつたものであり、「古決絶詞三首」(才調集卷五)と、題されている。

一

乍可爲天上牽牛 乍可 天上の牽牛織女の星と爲るも
織女星

不願爲庭前紅槿 願わず 庭前の紅槿花と爲るを
花

七月七日一相見 七月七日 一たび相見ゆ

相見故心終不移 相見て 故心 終に移らず
那能朝開暮飛去 那ぞ能くせんや 朝に開き暮に飛び

去りて

一任東西南北吹 一えに東西南北に吹くに任ぬるを

分不兩相守 分 兩には相守らず

恨不兩相思 恨 兩には相思わず

對面且如此 對面 且つ此の如し

背面當可知 背面 當に知る可し

春風撩亂伯勞語 春風撩亂として 伯勞は語る

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

況是此時拋去時 況んや是れ 此の時 拋去の時

握手苦相問 手を握りて 苦に相問うも

竟不言後期 竟に後期を言わず

君情既決絕 君の情 既に決絶し

妾意已參差 妾が意 已に參差たり

借如死生別 借如 死生の別ならば

安得長苦悲 安ぞ 長く苦悲するを得んや

二

憶春冰之將泮 憶あ 春冰の將に泮けんとするに

何余懷之獨結 何ぞ 余が懷の獨り結ばおれるや

有美一人 美しきひと一人有りて

於焉曠絕 焉に於いて曠絶す

一日不見 一日 見ずんば

比一日於三年 一日を三年に比す

況三年之曠別 況んや 三年の曠別をや

水得風兮小而已 水 風を得ば 小にして 已に波だ

波

笋在苞兮高不見 笋 苞に在れば 高きも 節を見ず

節

矧桃李之當春

矧んや 桃李の春に當るを

競衆人而攀折

衆人と競いて攀折らんことをや

我自顧悠悠而若

我自ら顧りみるに 悠悠として雲の

雲

又安能保君皚皚

又た安ぞ能く君が皚皚として雪の如

之如雪

きを保たんや

感破鏡之分明

破鏡の分明なるに感じ

靚淚痕之餘血

淚痕の餘血を靚る

幸他人之既不我

幸にして他人の既に我に先だたず

先

又安能使他人之

又た安ぞ能く他人をして終に我を奪

終不我奪

わざらしめんや

已焉哉

已焉哉

織女別黃姑

織女 黃姑に別る

一年一度暫相見

一年 一度 暫し相見る

彼此隔河何事無

彼此 河を隔てて 何事か無からん

三

夜夜相抱眠

夜夜 相抱きて眠るも

幽懷尙沈結

幽懷 尙お沈結するに

那堪一年事

那ぞ堪えんや 一年の事

長遣一宵說

長く 一宵に説か遣むるを

但感久相思

但だ久しく相思うに感じ

何暇暫相悅

何の暇ありてか 暫し相悦ばん

虹橋薄夜成

虹橋 夜に薄りて成り

龍駕侵晨列

龍駕 晨を侵して列なる

生憎野鵲惜遲廻

生きては野鵲の遲廻を惜しむを憎み

死恨天雞識時節

死んでは天雞の時節を識るを恨む

曙色漸瞳矓

曙色 漸く瞳矓

華星次明滅

華星 次いで明滅

一去又一年

一たび去らば 又た一年

一年何時徹

一年 何時にか徹せん

有此迢遞期

此の迢遞の期有るは

不如死生別

死生の別に如かず

天公隔是妬相憐

天公 隔に是れ相憐むを妬めば

何不便教相決絕

何ぞ 便ち相決絶せしめざる

「古決絶詞」と題するように、これらの詩は、特殊な詩型をとっている。元稹の豔詩は、大部分が律詩であり、ただこの詩のみが、その嚴密な韻律から脱している。このことは、この詩に盛られた感情の高揚が、詩型による制約を拒否した、ととることができ、後述する元稹の律詩の特色とも對比して、考えてみなければならぬ。

さて、この詩にみられる離別の悲しみは、單純なものではない。前述したような、元稹と雙文の悲劇がもつ複雑な性格が、この詩にも、表現されている。清の馮班（定遠1644～1681）は、この詩の第一首について、「薄なること、甚だし」、「詩人、敦厚を以つて教と爲す。元公、此の如し。其の屍を焚きて斂を成さざること宜なり」と非難し、第二首については、「今に至るも、之を讀めば、猶お人をして心を傷ましむ」といつている。この批評は、この詩の持つ複雑な性格を、不統一にはあるが、指摘している。馮班の非難する第一首は、雙文の立場から、うたわれている。雙文の悲しみは、心理的な苦悶をうたいつつ、激しく表現されている。それだけに、「君の情は、既に決絶して、

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

妾の意は、已に參差なり」という雙文の苦しみは、「君」が、元稹であることによつて、特別の意味を持つてゐる。自己の不誠實を、このように表現させたものは、何であろうか。二人の離別が、元稹の態度によつて惹き起されたことは、先に觸れたが、その態度の中にあつた矛盾が、この表現と關聯している。元稹のとつた態度は、自ら欲したものであるよりは、社會的な無形の壓力によつて、決定されたものであつて、離別は、雙文に對して冷酷であつたと同様、自己に對してさえ、苛酷なものが、秘められていたのである。この感情が雙文と共通する場で、元稹は、そううたつたのであり、この詩にみられる悲しみは、自分のものでもあつたわけである。第一首の終に、「借如、死と生の別だつたら、どうして、長く苦しみ悲しむことがあろうか」といい、第三首の終に、「此の迢な遞なわかれの時間よりは、いつそ、死と生の別のほうがいい」というのも、自己の態度の決し難い不安よりは、むしろ、それを無慈悲に踏みにじるものを、求めている。ここにおける元稹には、自己の能力によつては、もはや解決の手段を持たない不安

があり、そこには、社會的な壓力に對する屈服がみられる。

これは、元稹の人格にある、一つの弱點である。しかし、元稹の社會に對する屈服は、ここに始まるものではない。階級的な社會の中で、低い階層から成長してきた元稹は、自己を枉げることによつて、社會と妥協し、そこに活路をみいだしてきたのであり、それは、同様の境遇に置かれた時、すべての人格が、多少の差こそあれ、等しく備えるであろうところの弱點である。この詩で、雙文に對する戀慕の情が表面に出ないで、自己の不安な心理が、離別という場面で、内省的にうたわれていることは、上述した元稹の人格が、そうさせたものである。現實との對決は、この詩には、みられない。敗北する自己をみつめつつも、結局は、安易に、崩壊しつつある地面に、自己を、投げだしてしまう。これは、雙文に對しての冷酷な態度である。戀愛は、つねに、冒險的な行爲を求める。この點において、元稹は、きわめて小心であり、さては、自己の戀愛行爲を、現實から距離のある世界にさえ置き換えて、理解しようとしている。「古決絶詞」は、すでに、現實とは、やや次元を異にして、

うたわれている。

次に、「古決絶詞」とは、やや傾向を異にする作品について、みてみよう。やはり、雙文との離別をうたつた「離思六首」(才調集卷五)から、二首を摘録する。

一

自愛殘粧曉鏡中	自ら愛す	殘粧	曉鏡の中
環釵慢簪綠絲叢	環釵	慢に簪す	綠絲の叢
須臾日射臙脂頰	須臾	日は射す	臙脂の頰
一朵紅蘇旋欲融	一朵	紅蘇	旋ち融けんと欲す

二

山泉散漫遶階流	山泉	散漫として階を遶りて流れ
萬樹桃花映小樓	萬樹	桃花
閑讀道書慵未起	閑に道書を讀み慵くして未だ起きず	
水晶簾下看梳頭	水晶の簾下	頭を梳るを見る

「離思」と題するこの詩は、雙文との離別に際しての回憶の作とみられる。「古決絶詞」とは異つて、近體詩である。この詩を一讀すれば、まず、「遊仙窟」や「鶯鶯傳」の唐代傳奇小説と共通する性格の存在に、氣づく。それは、

現實の生活とは、あくまで次元を異にする世界のこととしてうたわれていることである。「古決絶詞」にみられた現實遊離の傾向は、この作品にあつては、傳奇的な世界への遊離として、あらわれている。従つて、この詩は、中國の傳統的な抒情詩とは、やや異り、中唐以後、元稹自身も、その作者の一人として加わつた傳奇小説の流れに沿つて、誕生したものであり、特に「鶯鶯傳」の一部分としての性格が、濃厚である。この詩にみられることは、もはや、感情の起伏を含む密度の高いことばではなく、小説の一部に變りうる程、煩瑣なことばである。これらの傾向は、當時、既にその名で呼ばれた元和體の、重要な要素である。元和體については、「令狐相公に上る詩の啓」(集外)で、自ら説明している。それに従えば、二つの傾向に分けて考えられる。一つは、次韻相酬の長篇の排律であり、「夢遊春」等が、それを代表する。他の一つは、杯酒の間に生まれた小さな詩篇であり、今、ここに引用した「離思」等が、これに含まれる。これらの元和體に對する元稹の理解は、「詩を進むる狀」(元集三)(十五)にみえる。

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

……故に、古風詩より古今樂府に至るまでは、稍や寄興を存し、頗か諷諷に近し。作者の風、無しと雖ども、粗ぼ遑人の採るに中る。律詩百韻より兩韻七言に至るまでは、或は、朋友に因りて戯れに投じ、或は、悲歡を以つて自ら遣る。既に、六義なく、皆、一時に出でて、詞旨繁蕪なれば、倍ます慙恐を増す。

前者は、新題樂府等に代表されるものであり、詩三百篇の精神に則つてゐる。それに對して、社交的な詩や、感情のままを表現する詩の存在を認め、それらは、詩三百篇の流れに立たざるものとして、認識された。従つて、元和體の詩においてこそ、元稹の個性は、より率直に表現されているとも考えられ、ここにおいてこそ、新しい詩人として發展しうる可能性が、より多く藏されていたわけである。この可能性の上に、元稹の豔詩は、作られている。「離思」は、この可能性の、一つの實現であつた。それに對して、「古決絶詞」は、元和體の詩とは異つており、兩者の特色は、兩者を對照することによつて、明らかにすることが出来る。「古決絶詞」は、激しい感情を表現するために特殊

な詩型をとつた。それと對蹠的に、「離思」は、律詩であつて、「聲聲麗曲 寒玉を敲き、句句妍辭 色絲を綴る」、その反面、「古決絶詞」にみられた、高揚した感情は、全く姿を消している。なるほど、「麗曲」であり、「妍辭」を盡す點で、この詩は秀れる。しかし、それは、餘りに過度であることによつて、抒情詩としての感情の燃焼が、犠牲にされたのであり、自己は、詩の外に存在する。これは、もはや、元稹と雙文の個別的な戀愛を、表現したものではない。しかし、その表現の仕方によつて、元稹の雙文に對する態度は、顯著に示されているとも理解出來よう。

元和五年に作られた「夢遊春」の中に、「覺と夢 殊る」と云うと雖ども、同に是れ終に駐まり難し」という二句がある。これは、韋叢との結婚生活を、「覺」といい、雙文との戀愛生活を、「夢」というのである。雙文との戀愛が、現實の生活とは、次元を異にするものとして、うたわれてゐることは、それに對する元稹の認識に基く。すなわち、元稹の認識した人生における戀愛の位置は、あくまで附隨的な存在としてであつて、その中心に位置せしめた

結婚生活とは異なる。この態度が、離別の悲哀を感じつつも、現實との對決において、容易に挫折した因であり、その文學が、對決の場において作られずに、別の方向に傾いていつたのは、それによつてである。このことが、不安の中にある自己の姿を、その文學に、きびしく表現することを、拒んだのである。北宋の文學者・蘇軾（東坡 1036~1102）が、「柳子玉を祭る文」（東坡全集 卷六十三）で、「元輕なる評を下しているが、豔詩についてみれば、この評語は的確である。

元稹の豔詩は、上述した「古決絶詞」と「離思」に代表されるような二つの傾向を、含んでいる。これらの詩に、小規模な型であらわれている小説的な敘述の傾向は、元稹の詩の注目すべき一面である。それは、豔詩については、まだ成功の域に達していないが、後述する悼亡詩では、より秀れた技巧として、あらわれてくる。

注

- ① この「離思六首」は、七言律詩一首と、七言絶句五首からなつてゐる。馬元調の元氏長慶集補遺卷一では、七言律詩を、「鶯鶯詩」と題して、他の「離思五首」と、區別している。或

は、正しいかも知れない。

雲谿友議下の「豔陽詞」の條に、これを、悼亡詩だと云つて
いるが、杜撰であらう。

② 白氏長慶集卷二十二に、「酬微之」と題してみえる詩の二句
である。この詩は、第一章にその題を引用した「郡務稍簡云云」
と題する詩に、酬いたものである。自注に引用された元稹の詩
の題は、元氏長慶集に載せるそれとは、多少字句に異同がある。

四

悼亡詩は、元和四年、妻韋叢を亡くした悲しみを、うた
つたもので、「詩に敘して、樂天に寄する書」で、「不幸、
少くして伉儷こうれいの悲しみあり。存を撫し、往に感じて、數十
詩をなし、潘子はんし（潘岳はんがく）の悼亡に取りて、題と爲す」とい
うのが、それである。元氏長慶集六十卷には、三十三首の
悼亡詩が、收録されている。元稹以前の悼亡詩としては、
西晉の潘岳（安仁 247～300）のものが有名で、文選に、採
られている。元稹が、潘岳の悼亡詩を、意識していたこと
は、「詩に敘して、樂天に寄する書」にみえるとおりで、
作品の中にも、潘岳の名は、しばしばみえる。このことは、
自らの悼亡詩を、潘岳に源を發する流れの上に、位置づけ

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

ていることを、意味する。と同時に、この解説の中には、
悼亡詩が、元稹に先行する唐代の詩人の中では、必ずしも
恒のことではなかつたが故に、潘岳の名をかりて、自己の
作品の位置を、主張しているとも、取られる。これと、先
に論じた豔詩について、當時の文化人の中に、冷淡な態度
が、みとめられたことを、考え合わせるとき、そこには、
創作の場における傳統意識の問題が、ひそんでいる。悼亡
詩において、激しく感情を燃焼させた元稹が、豔詩にあつ
ては、極度に感情の稀薄な作品を遺したことは、詩の流れ
における異端者であることを自覺し、それを不安としたこ
とも、一つの因が求められるかも知れない。悼亡詩は、
その點に關しての不安が全くなく、潘岳にはじまる傳統に、
新しい生命を復活すべき、詩人としての誇りがあり、事實、
その作品は、激しい悲哀の情に、裏附けされつつ、大膽に
新しい詩の世界を、開拓している。

次に、韋叢の死を悼んだ「三遺悲懷」^①（元稹元集）を、とりあ
げてみよう。

一

謝公最小偏憐女 謝公が最小にして偏憐の女

自嫁黔婁百事乖 黔婁に嫁してより 百事乖る

顧我無衣搜蠹篋 我が衣無きを顧て 蠹篋を搜し

泥他沽酒拔金釵 他を泥わして酒を沽うに 金釵を拔

かしむ

野蔬充膳甘長藿 野蔬 膳に充てて 長藿に甘し

落葉添薪仰古槐 落葉 薪に添えて 古槐に仰ぐ

今日俸錢過十萬 今日 俸錢 十萬を過ぐ

與君營奠復營齋 君が與に 奠を營み 復た齋を營む

二

昔日戲言身後意 昔日 戲れに言う 身後の意

今朝皆到眼前來 今朝 皆な眼前に到つて來る

衣裳已施行看盡 衣裳 已に施して 行々盡くるを看

針線猶存未忍開 針線 猶お存するも 未だ開くに忍

びず

尙想舊情憐婢僕 尙お想う 舊情 婢僕を憐むを

也曾同夢送錢財 也曾 同に夢む 錢財を送る

を

誠知此恨人人有 誠に知る 此の恨 人人有るも

貧賤夫妻百事哀 貧賤の夫妻 百事哀し

三

閒坐悲君亦自悲 閒坐 君を悲しみ亦た自らを悲しむ

百年都是幾多時 百年 都是是れ 幾多の時ぞ

鄧攸無子尋知命 鄧攸 子無く 尋に命を知り

潘岳悼亡猶費詞 潘岳 亡きひとを悼んで 猶お詞を

費す

同穴窅冥何所望 同穴の窅冥 何の望む所ぞ

他生緣會更難期 他生の緣會 更に期し難し

唯將終夜長開眼 唯だ終夜長く開ける眼を將つて

報答平生未展眉 平生未だ展かざる眉に報答す

「唐詩三百首」の編者、蘅塘退士は、この三首を評して、

「古今の悼亡詩は、棟に充つるも、能く此の三首の範圍を

出づる者、無し。・淺近なるを以つて、之を忽かにする勿

れ」と、きわめて高く評價している。同時に、「淺近」な

る二字を、この詩の特長として、理解している。この理解

は、的確である。三首は、家庭生活を基にして、うたわれ

ている。この三首と表裏する、「亡き妻韋氏を祭る文」
(元集六十)で、元稹は、家庭における韋叢を、次の如く語つて
いる。

我に歸ぐに速んで、始めて賤貧を知りぬ。食、亦た飽
かず、衣、亦た温かからず。然ども、色に悔いず、言
に感えず。他人、我を以つて拙と爲すも、夫人、我を
以つて尊しと爲しぬ。生涯を濫落に置くも、夫人、我
を以つて道に適えりと爲せり。晝夜を朋宴に捐つるも、
夫人、我を以つて狎りと爲しぬ。賢なること、幸中の
言に、隠る(不)明。嗚呼、我を成せる者は、朋友にして、
我を恕す者は、夫人なり。夫れ此の如き感有るは、夫
人の仁に非ずや。

名家に育つた韋叢も、元稹と結婚してからは、きわめて
貧しい生活に耐えたことが知られる。二人は、この貧困に
抵抗しつつ、夫婦の情愛を深めていつた。「我を恕す者は、
夫人なり」ということばの中に、二人の間柄は、的確に表
現されている。元稹にとつて、白居易の如き友人は、なる
ほど、「我を成す者」ではあつたが、「恕す者」ではなか

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

つた。不安な社會生活に耐える元稹が、何より求めたもの
は、共通の苦しみ耐えて、自己を恕してくれる人間であ
つた。「恕」は、ことばを換えれば、「やさしさ」である。
元稹の生きた社會に、「やさしさ」は、なかつた。この「や
さしさ」を、韋叢にみいだしたのである。二人を結んだも
のは、「やさしさ」であつた。貧困は、なにより苦しいも
のである。韋叢と元稹は、共にこの苦しみに耐えることに
よつて、その関係を成長させていつたのである。元稹が、
韋叢をうたうとき、つねに貧困な生活をうたうのは、韋叢
に對する理解が、そこでなされたことを、物語つてゐる。

以上に述べたような關係の中で、「三遣悲懷」は、うた
われている。詩は、蕩塘退士のいう如く、「淺近」である。
この「淺近」こそが、この詩の最も特長的な點であり、こ
の詩の成功も、又、この點によつてゐる。潘岳の悼亡詩に
ついて、高橋和巳氏は、「潘岳論」の中で、「潘岳の詩の
表現法は、代詠詩(代作された歌 筆者)や模擬詩が必然的
に持つ、ある一般性をより多く持つてゐる」(本誌第七
冊三五頁)と述べてゐる。潘岳の悼亡詩を意識して作られた、元稹のこ

これらの詩は、それとは對蹠的な特長を、持つている。元稹の詩は、完全に元稹と韋叢との個性の中で、うたわれている。しかも、それは、日常的な平面で、捉えられている。その日常生活は、貧困であつた。従つて、これらの詩は、つねに貧困の悲しさによつて、韋叢を悼む情を、強めている。このことを、第一首についてみると、まず第一聯で、父の愛情をほしいままにして、幸福な生活を送つていた韋叢が、元稹と結婚するに及んで、不如意な境遇に、陥つたことをいい、第二聯は、貧しい生活の中での愛情を、第三聯では、貧しさに耐える韋叢をうたい、第四聯に至つて、その死後に、やつと幸福を享受すべき經濟的な基礎を得ても、それは、もはや幸福を築くべきものではなく、ただ黄泉の韋叢を悼む資としかなりえぬことを、嘆く。悲哀は、幾重にも重なつてゐる。生前の韋叢の經濟的な勞苦は、すでに元稹にとつて、悲哀であつた。韋叢との愛情生活を阻んだ死は、更に悲しみを、惹き起す。この死を隔てて、今は、幸福な生活への基礎を、獲た。この空虚さは、死の悲哀を、一層強いものとして、元稹の胸を刺す。悲哀は、第

三聯と第四聯の間によこたわる無限の隔絶に、極まつてゐる。うたう題材は、「淺近」であるが、その「淺近」なものの中にみいだされるところの最大の深淵をみつめつつ、悲哀を、二重三重に、交錯させて、この詩は、成功している。これらの悲哀は、元稹にとつては、人生の中心に位置する悲哀であつた。雙文との戀愛を、「夢」として、うたつた元稹は、韋叢との結婚については、人生そのものの悲哀を、うたつてゐる。人生をみつめる點において、元稹は、「覺」めていた。元稹は、戀愛に比べて、より平凡にも思われる韋叢との結婚生活の中に、人生を、みつげだすことができた。又、その平凡さが、それを、夢の世界に引き込むことを拒否したともいえるのである。

次に、元稹の詩の特色である小説的な技巧が、悼亡詩の中に、どうあらわれてゐるかを、探つてみよう。

士曹參軍として、江陵にあつた日の作、「江陵三夢」(元集卷九)の第一首は、次の如くである。

平生每相夢 平生 毎に相夢みるも

不省兩相知 省て兩に相知らず

況乃幽明隔 況や乃ち 幽明隔たり

夢魂徒爾爲 夢魂 徒爾爲なるをや

情知夢無益 情に夢の益なきを知るも

非夢見何期 夢に非れば 何の期にか見ん

今夕亦何夕 今夕 亦た 何の夕ぞ

夢君相見時 君と相見する時を夢む

依稀舊粧服 依稀たり 舊き粧服

暗淡昔容儀 暗淡たり 昔の容儀

不道問生死 道わず 生死を問つと

但言將別離 但だ言う 將に別離せんとすと

分張碎針線 碎けし針線を分張し

櫛疊故幃幃 故き櫛疊を櫛疊す

撫稚再三囑 稚きこを撫して 再三囑し

淚珠千萬垂 淚珠 千萬垂る

囑云唯此女 囑して云う 唯だ此の女ひとり

自歎總無兒 自ら歎ず 總べて兒無きを

尙念嬌且駭 尙お念う 嬌にして且つ駭

未禁寒與飢 未だ寒と飢に禁えず

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

君復不憶事 君 復た 事を憶はず

奉身猶脫遺 身に奉ずることすら猶お脱遺す

況有官縛束 況んや 官の縛束有り

安能長顧私 安ぞ能く長く私ごとを顧んや

他人生間別 他人 生間の別

婢僕多謾欺 婢僕 多く謾欺す

君在或有託 君在らば 或は託する有り

出門當付誰 門を出づれば 當に誰にか付すべき

言罷泣幽噎 言罷みて 泣くこと幽噎

我亦涕淋漓 我 亦た 涕淋漓たり

驚悲忽然寤 驚悲して 忽然寤め

坐臥若狂癡 坐臥 狂癡なるが若し

月影半牀黑 月影 半牀に黒く

虫聲幽草移 虫聲 幽草に移る

心魂生次第 心魂 次第に生じ

覺夢久自疑 覺夢 久しく自ら疑う

寂默深想像 寂默 深く想像すれば

淚下如流澌 淚下ること 流澌の如し

百年永已訣 百年 永く已に訣る

一夢何太悲 一夢 何ぞ太だ悲しき

悲君所嬌女 悲しむは 君が嬌しめし女

棄置不我隨 棄置 我に隨がわざるを

長安遠於日 長安 日よりも遠く

山川雲間之 山川 雲 之を間つ

縱我生羽翼 縱え 我 羽翼を生ずるも

網羅生繫維 網羅 繫維を生ず

今宵淚零落 今宵 淚 零落

半爲生別滋 半は生別の爲に滋し

感君下泉魄 君が下泉の魄に感じ

動我臨川思 我が臨川の思を動かす

一水不可越 一水 越うべからず

黃泉況無涯 黃泉 況んや涯無きをや

此懷何由極 此の懷 何に由りてか極めん

此夢何由追 此の夢何に由りてか追うべき

坐見天欲曙 坐して見る 天 曙んと欲するを

江風吟樹枝 江風 樹枝に吟ず

この詩は、夢をうたつてゐる。このように、元稹は、しばしば夢をうたう。ここにうたうところは、「三遺悲懷」

と同様であつて、韋叢の死の悲哀と、一女保子とともに遺

された自己に對する不安との交錯である。夢の中には、保

子を愛する韋叢の、家庭における細やかな心遣いが、うた

われている。しかも、夢中の韋叢は、離別に臨んだ韋叢で

ある。夢の世界に、すでに悲哀がある。しかし、そこには、

韋叢が生きている。やがて、その悲哀が極まつた時、元稹

は、もはや韋叢のいない現實の世界にかえる。そこには、

更に強い悲哀の世界がある。夢の中の韋叢が、生き生きし

ていれば、それだけ、死の現實との對比は、鋭い。元稹は、

きわめて巧みに、韋叢を描いている。嚴しい死の現實に對

して、あまりにも、生き生きした韋叢である。しかし、元

稹は、これに勝る悲哀を、現實の世界に、みいだす。それ

は、遺女保子である。社會的な不遇に苦しむ元稹の悲哀は、

夢の中の韋叢のことばと對應して、極まる。この二つの悲

哀は、元稹にとつては、解決することのできない、宿命的

なものとして、受けとらねばならぬものであつた。結句の、

自然の光景に眼をやる元稹は、人生の不安と、自然の不變との對比のうちに、人間の悲劇性を、みつめてゐる。

この一首にうたい込まれた夢は、きわめて効果的である。

フィクシヨンを巧みにすることによつて、詩は、生きてゐる。豔詩にも、フィクシヨンへのふくらみは、みられた。

しかし、その世界は、傳奇的な、特殊なベールの向うに構成されており、現實との對比という型では、うたわれなかつた。それに對して、この詩にみられる夢は、杳があり、その杳の中で、現實の世界を、再構成している。元稹の巧みな技巧は、悼亡詩において、一段と冴えてゐる。

この構成的な技巧を、より顯著に示すものは、「井を夢む」(元集卷九)と題する詩である。

夢上高高原 夢に上る 高高原

原上有深井 原上 深井有り

登高意枯渴 高きに登りて 意 枯渴し

願見深泉冷 深泉の冷きを見んことを願う

徘徊遶井願 徘徊 井を遶りて願ひ

自照泉中影 自ら照す 泉中の影

元稹の豔詩及び悼亡詩について(山本)

沈浮落井瓶 沈浮す 井に落つる瓶

井上無懸綆 井の上に 懸綆無し

念此瓶欲沈 此の瓶の沈まんと欲するを念いて

荒忙爲求請 荒忙 求請を爲す

遍入原上村 遍く原上の村に入る

村空犬仍猛 村空しくして 犬仍お猛し

還來遶井哭 還り來りて 井を遶りて哭す

哭聲通復哽 哭聲 通じて復た哽ふ

哽噎夢忽驚 哽噎 夢 忽ち驚め

覺來房舍靜 覺め來れば 房舍靜かに

燈焰碧朧朧 燈焰 碧くして 朧朧

淚光凝罔罔 淚光 凝りて 罔罔

鐘聲夜方半 鐘聲 夜 方に半ば

坐臥心難整 坐臥 心 整い難し

忽憶咸陽原 忽ち憶う 咸陽の原

荒田萬餘頃 荒田 萬餘頃

土厚墳亦深 土厚くして 墳亦た深く

埋魂在深塋 魂を埋めて 深塋に在り

埂深安可越 埂深ければ 安ぞ越ゆ可き

魂通有時逞 魂通すること 時に逞いままにする有り

今宵泉下人 今宵 泉下の人

化作瓶相警 化して瓶と作りて相警しむ

感此涕洟瀾 此に感じて 涕 洟瀾

洟瀾涕霑領 洟瀾 涕 領を霑す

所傷覺夢間 傷む所は 覺夢の間

便覺死生境 便ち覺ゆ 死生の境

豈無同穴期 豈に同穴の期無からんや

生期諒綿永 生期 諒に綿永たり

人恐前後魂 人は恐る 前後の魂

安能兩知省 安ぞ能く兩に知省せんや

尋環意無極 尋環 意 極まる無く

坐見天將昞 坐して見る 天の將に昞んとするを

吟此夢井詩 此の夢井の詩を吟ず

春朝好光景 春朝の好光景に

この詩も、「江陵三夢」の第一首と、ほぼ似た構成であるが、夢の世界は、より象徴的である。男女の離別を、落

瓶をかりてうたうことは、古くからある。次に、その最も早い例である齊の釋寶月の「估客樂」と、閨情の詩をよくした盛唐の李白の「遠きに寄す」を、採つて、どううたわれているかを、くらべてみよう。

估客樂 釋寶月

有客數寄書 客あらば數々書を寄せよ

無信心相憶 信無ければ 心に相憶う

莫作瓶落井 瓶の井に落ちて

一去無消息 一去 消息無きを作す莫れ

寄遠十二首之八 李白

憶昨東園桃李紅 憶う昨 東園の桃李紅碧の枝

碧枝

與君此時初別離 君と此の時 初めて別離す

金瓶落井無消息 金瓶 井に落ちて消息無く

令人行歎復坐思 人をして行きて歎じ復た坐して思わ

しむ

坐思行歎成楚越 坐して思い 行きて歎じ 楚越を成

す

春風玉顏畏銷歇 春風 玉顏 銷歇を畏る

碧窓紛紛下落花 碧窓 紛紛として落花を下し

青樓寂寂空明月 青樓 寂寂として空しく明月あり

兩不見 兩つながら見ず

但相思 但だ相思う

空留錦字表心素 空しく錦字を留めて 心素を表す

至今緘愁不忍窺 今に至つて 愁を緘して窺うに忍び

ず

この二首にうたわれている落瓶は、單純である。それに對して、元稹の詩は、動的であり、かつ構成的である。そこには、運命に對する胸の裂けるような空しい抵抗感が、なまなましく表現されており、讀者の心を、激しくゆさぶる。元稹は、古くから使われてきた比喻に、全く新しい生命を、賦與している。この新しい生命は、體驗に基く激しい感動と、それを表現する小説的な敘述の巧みさによつて、生まれたものである。これこそ、元稹が、中國の詩の傳統の上に開拓した、新しい世界である。

元稹の豔詩及び悼亡詩について（山本）

注

- ① この詩の作られた背景については、陳寅恪氏の「元微之遺悲懷詩之原題及其次序」（清華學報ⅩⅢ）があるが、陳氏は、「元白詩箋證稿」で、その考證を取消して、わからないとしている。「唐詩三百首註疏」（掃葉山房・一九三六年）を撰した章燮（象德）や、「元白詩選」（上海春明出版社・一九五六年）の撰者蘇仲翔氏は、俸錢の額からして、宰相になつてからの作品だとしている。しかし、私は、韋叢の死後、そう遠くない時期に作られたのではないかと、臆測する。長慶集卷九の悼亡詩は、大體、制作順に並んでいることも、注意されてよからう。
- ② この比喻は、白居易の「井底引銀瓶」（白氏長慶集卷四）にも、使われているが、ここでは、それには觸れない。
- ③ この詩は、樂府詩集卷四十八、及び古詩紀卷六十二に、齊の釋寶月の作つた估客樂として見え、玉臺新詠卷十には、近代西曲歌五首の一つとしてみえる。

五

元稹の生涯は、不安なものであつた。その人生にあつて、雙文及び韋叢の二人の女性との關係は、その不安を形成する二つの頂點にあるともいえよう。「夢遊春」で、「覺と夢は殊なると云うと雖ども、同に是れ終に駐り難し」と、

うたつてゐる。ただ、自己の人生を考えると、韋叢との關係を、その中心に位置する不安として理解し、雙文との關係は、やや中心を離れたものとして理解している。この差異が、それらの作品を、各々特色づけている。

田部重治氏は、ペーターの「文藝復興」(岩波文庫版)に序して、次のように云つてゐる。

吾々は、敬意を拂ふべき性格の二種の典型を想像することが出来る。一つは發作的と思はれるほど間歇的に、或種の經驗に沈潜して、それがやがて個性の強烈なる統一を誘導するに至る、生命の進行上、比較的に分裂的傾向を有するもので、も一つは日常の刻々の些細なる刺戟にも、絶えず深刻なる意義を見出して、いつも自己を見つめて行くことの出来るものである。

豔詩と悼亡詩を読むとき、元稹は、より前者の性格を濃厚にもつてゐると思われる。たとえば、個性の強烈な統一には、至らなかつたとしても、というよりも、元稹が、「日常の刻々の些細なる刺戟にも、絶えず深刻なる意義を見出して、いつも自己を見つめて行くことの出来る」性格の持

主でなかつたことを、強調するのが、より正しいであろう。